

Diversified Selection of Sorghum bicolor and Development of Indigenous Varieties : A Case from the Erbore in Southwestern Ethiopia

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮脇, 幸生 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004258

モロコシの多様化選択と品種の生成

——エチオピア西南部におけるクシ系農牧民エルボレの事例から——

宮 脇 幸 生*

Diversified Selection of *Sorghum bicolor* and Development of Indigenous Varieties: A Case from the Erbore in Southwestern Ethiopia

Yukio MIYAWAKI

This paper describes native methodology of sorghum cultivation and selection of indigenous varieties in an agro-pastoral society in southwestern Ethiopia. It shows how the people have developed their varieties through their diversified selection practices.

The Erbore are a Cushitic agro-pastoral people dwelling along the Weito River. Seasonal flooding of the river provides them with fertile inundated plains and allows them to cultivate sorghum in a large number of varieties in the semi-arid environment.

Sixty-one vernacular varieties of sorghum have been collected through an interview with 28 informants. The inventory of Erbore varieties exhibits diverse difference in frequency of reference by informants in terms of recognition and cultivation. Eleven varieties are recognized by the majority of the informants, while 23 varieties are referred to only by single informants. Five varieties are cultivated by more than 10 informants, while 32 varieties are cultivated by none.

Informants differing in age give different inventories of varieties. Older informants tend to refer to less-known varieties than younger informants.

These differences reflect both the properties of each variety and the process of selection practices. Some well-known varieties have useful

* 大阪府立大学, 国立民族学博物館共同研究員

Key Words : Ethiopia, Erbore, sorghum, indigenous varieties, diversified selection
キーワード: エチオピア, エルボレ, モロコシ, 在来品種, 多様化選択

properties such as pest-bird resistance. Such varieties constitute the core varieties preferred and cultivated by most people. These varieties have been preserved from generation to generation. Other varieties constitute the fringe varieties. Some of them are known only to the older generation by their names. This probably means that they have recently been discarded and lost.

The diversity of the indigenous varieties have been maintained through diversified selection practices. The process is twofold. First, a morphologically distinct mutant (*yoofo*) is preserved and kept for the next season. Cultivation of one variety on one spot enables people to recognize the morphological distinctiveness of such a mutant. Second, the new variety is given a name and multiplied experimentally. Through this process, its properties are carefully observed. If some of its properties are judged to be useful, the variety will be kept to be sown again. If judged to be useless, it will be discarded.

The diversity of the indigenous varieties are the result of an ongoing process of selection and preservation. The natives' criteria and practices related to these activities are the important issues to be considered.

はじめに

エチオピアのモロコシ

調査地域

1. 地形・気候・植生
2. 言語・社会
3. 生業

エルボレのモロコシ栽培

1. モロコシの利用法
 - (1) 食用
 - (2) 儀礼用
 - (3) その他

2. モロコシの栽培

3. モロコシの品種名と知識の社会的配
分

(1) 想起された品種

(2) 品種に関する知識の社会的な配分

(3) 実際に栽培されている品種

4. 品種を弁別する基準
品種多様化のダイナミズム

1. 品種の多様化と系統維持のメカニズ
ム

(1) 在来種

(2) 外部からの新品種の導入

(3) 新品種の創出

2. 認知選択と実用選択

3. 実用選択の意味

結語

はじめに

いわゆる「未開社会」では、さまざまな栽培植物において多様な品種が保持され、またその純粋種が維持されていることが知られている。Anderson は、グアテマラのインディアンの伝統的農業を例に引きつつ、彼らの栽培するトウモロコシが、品種の点で、いかに厳密な選別ができていくかについて報告している。そして「交雑しやすい作物」であるトウモロコシの純粋種の維持に対して、彼らがどれほど注意を払っているかについて注目し、未開民族が育種に無頓着であるという、それまでの通念に対して、反論を加えている [ANDERSON 1952]。Levi-Strauss は「野生の思考」の中でこの Anderson の報告を、広く「未開社会」に見られる「弁別的差異への関心」の経験的活動における具現の証左として取り上げた [LEVI-STRAUSS 1962]。それまでほとんど顧みられることのなかった「野生の思考」における「差異と分類への関心」と、その精緻なシステムを提示した Levi-Strauss の功績を、ここであらためて強調するまでもないだろう。けれども栽培植物における品種の多様化という現象は、性急に一般論の中に解消してしまうには、あまりにも多くの問題をはらんだトピックではないだろうか。それはいまだ、経験的な調査を必要としている課題なのである。

栽培植物の在来品種の地域的な多様性は、Vavilov の研究以来、作物栽培の起源地の指標として注目されてきた。さらに近年では、遺伝資源保存の立場から、遺伝的にも多様性に富んだ在来種の保存の必要性が唱えられている [HARLAN 1975]。

こうした栽培起源論、あるいは遺伝資源収集の立場からなされた考古学的、植物学的調査は、これまでもかなりの数に上る。けれども、地域社会に生きる人々が、多様な在来種をどのようにして認知し、選抜し、維持し続けてきたのかについての人類学的な調査が開始されたのは、つい最近のことにすぎない [BRUSH *et al.* 1981]。

仮に以上のような民俗的社会に見られる作物栽培の方法論に関する調査研究を、広く土着の民俗的科学研究 [FUKUI 1987] の一環としてとらえるならば、これらの新たな研究動向の特徴は、以下のような諸点に求められるだろう。まず第1に、こうした土着の知識に西欧科学の尺度を当てることにより、それを劣ったもの、あるいは逆に意外に優れたものとみなすような、一元的な価値判断を避けることである。第2に、こうした土着の知識を、できあいの図式的なものとしてとらえるのではなく、知識の社会的な配分やその運用について繊細なまなざしを向けることである [BOSTER 1985b]。第3に、品種の多様性のような現象を、単なる「結果」とみなすのではなく、

ヒトと植物の間にとりなされ、常に生起し、進行しつつあるプロセスとしてとらえることである。そして第4に、「土着の科学」を、「西欧科学」のように、人々に意識されている知識や、意図的に行われている方法に限定してとらえるのではなく、さらに人々の意識していない行為の持つ機能的連関をもとり込む形でとらえることである [重田 1991]。

このような、品種の多様化とその維持をめぐる人—植物間の関係については、栄養体繁殖の作物であるアンデスのジャガイモ [JACKSON *et al.* 1979; BRUSH *et al.* 1981; JOHNS and KEEN 1986], キャッサバ [BOSTER 1984, 1985a, 1985b], エチオピアのエンセーテ [重田 1988], パキスタンのナツメヤシ [松井 1991] について詳細な報告を見ることができる。それに対して、種子繁殖の栽培植物については、筆者の知るかぎりでは、シエラ・レオネのイネ栽培についての報告がなされているに過ぎない [RICHARDS 1986]。

本稿の目的は、以上のような研究動向の上になち、アフリカの代表的な種子繁殖の作物であるモロコシ栽培をめぐる、人と植物の相互作用の実態について報告することにある。対象とする社会は、エチオピア西南部のクシ系農牧民エルボレである。本稿では特に、この社会において品種の多様化と系統維持がいかなるやり方で行われているかについて論及し、民族社会における品種の選抜・育種の動的側面を強調する。そして品種多様化のプロセスには、人々の、栽培植物の形態的特徴に対する微細な差異の認知だけでなく、実用上の基準に照らした取捨選択が関与していること、さらには表立っては意識されない行為や慣習が、品種の選択と維持、そして多様化を可能にする、潜在的な条件として機能していることを明らかにする。

エチオピアのモロコシ

モロコシ (*S. bicolor* (L.) Moench) はアフリカ原産のイネ科の作物である。モロコシとその近縁野生種は形態的な変異が大きく、ことに栽培種のモロコシには、顕著な多型が見られることが知られている。栽培種のモロコシを初めて網羅的に分類した Snowden は、32種、158もの品種を認めた [HARLAN and DE WET 1972]。近年になって de Wet と Harlan により、小穂の形状に基づいたより簡潔な分類が提示されている。それによれば *S. bicolor* (L.) Moench は、4系統の野生種を含む *arundinaceum* 亜種と5系統の栽培種を含む *bicolor* 亜種に二分される [DE WET, HARLAN and PRICE 1976]。

bicolor 亜種はその中に、bicolor, guinea, kafir, caudatum, durra という5系統の栽培種を含んでいる。これらは小穂の形状が異なっているだけでなく、地域的な分布にも偏りが見られる(表1)。

エチオピアでは栽培種5系統のうち、durra, bicolor, guinea, caudatum の4系統が栽培されている [STEMLER, HARLAN and DE WET 1977]。このうち最もひろく栽培されているのは durra で、標高1000メートルから2000メートルの東部高原地帯を中心に栽培される。durra はもともとインドで起源した系統である。

エチオピア西部および西南部の高地では、durra と bicolor の中間型が栽培される。散開型の花序を持ち、果皮にポリフェノール(タンニン)を含有するこの種は、カビなどに侵されやすく冷涼で湿潤なこの地方の気候に適応したものと思われる。

一方西南部低地の乾燥したサバンナ地帯では、caudatum が栽培される。この地域はナイル系、スルマ系の牧畜文化が卓越し、スーダン南部のナイル系牧畜文化との共通性をみることができる。Stemler らによれば、この地域で栽培されている caudatum も同様に、ナイル系牧畜文化に特有の系統である。

このほか、西南部高地のクシ系農耕民コンソでは、西アフリカに多く見られる guinea 種の栽培が確認されている [STEMLER *et al.* 1977]。

エルボレに見られるモロコシの多くは caudatum であり、ナイル系牧畜文化との共

表1 栽培型ソルガム5系統の形状と栽培地域

	小穂の形状	花序の形状	栽培地域
bicolor	細長い穎果、それを包み込む長い穎を持つ。	散開型	アフリカ全域のソルガム栽培地域に小規模に見られる。インド、ビルマ、中国。
guinea	片方の腹面のへこんだ凸レンズ型の穎果。成熟時、大きく開いた苞穎に対して90度ねじれる。	散開型	シエラ・レオネからナイジェリア東部にかけての比較的雨量の多い西アフリカ地域。
caudatum	扁平で、先端がくちばしのようにとがった穎果。	密穂型・堅穂型・散開型	チャド、スーダン、ナイジェリア、ウガンダなど、中央アフリカのサバンナ地帯。
kafir	丸く小さな穎果。	密穂型	アフリカ南部。
durra	穎果は倒立した卵型。苞穎に水平なひだが入る。	密穂型	インド、中近東、エチオピア、スーダン。

Harlan and de Wet [1972] より作成

通性がうかがわれる¹⁾。東部で栽培される *durra* は確認できなかった。

調査地域

1. 地形・気候・植生

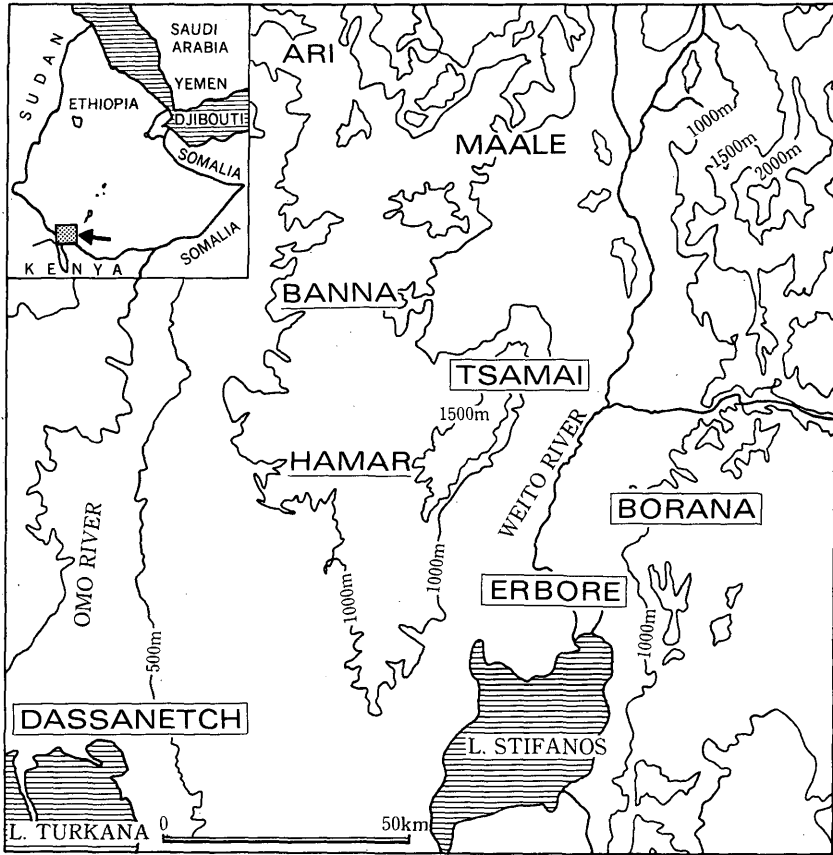
本稿で報告する調査の対象としたエルボレ (Erbole) は、エチオピアの西南部サウスオモ州に居住する、人口2000人程のクシ系農牧民である。エルボレのテリトリーは、北緯4度50分から57分、東経36度45分から37分の間に位置し、面積約400平方キロメートル、標高500メートルほどの半乾燥低地である。テリトリーの東端を北から南にウェイト川 (*Limo*) が流れ、ケニア国境にあるステファニー湖 (*Chelbi*) に注ぐ。エルボレはこのウェイト川下流の沿岸地域から、ステファニー湖の北岸にかけて居住している (図1)。

エルボレのテリトリーを含むエチオピア西南部の一帯の低地は、年間の降雨量が200ミリから600ミリの半乾燥地帯である。この地域の降雨パターンは、年に2回の雨季を持つことにより特徴づけられる。降雨月は2月から7月および9月と10月の8か月で、特に4月に集中的な降雨をみる [GAMUCHU 1977]。月毎の平均気温は年間を通じて変化が少なく、2度から3度の偏差内にとどまる。北緯4度15分、東経35度45分に位置し、エルボレと同一の気候帯に属するトゥルカナ湖西岸の Lokitaung の観測値によれば、年平均の最高気温32度、最低気温22度、年平均の平均気温が27度である [BUTZER 1971]。

エルボレは、1年 (*guh*) を12の月 (*le*) に区分し、それぞれに名称を与えているが、日常的に用いられるのは降雨に基づいた季節的な区分である。前述のように、エルボレの居住地域の気候は、年に2回の雨季によって特徴づけられる。エルボレは、最も雨量の多い2月から6月にかけての大雨季を *guh*、9月から11月の小雨季を *hagai*、これらの間にはさまれる12月から1月、7月から8月にかけての乾季を *mar* と呼び、1年を名称上は3つ、実際には4つの季節に区分している。

guh と *hagai* の降雨は、ウェイト川に大規模な氾濫をもたらすという点で、エルボレの農耕活動にとってたいへん重要な意味を持つ。ウェイト川は、エルボレの居住地域でも、乾季には幅が10メートル、深さ50センチほどの小河川にすぎない。けれども

1) 今回調査地で収集した21サンプルのうち、*caudatum* が20サンプル、*durra-bicolor* の中間型が1サンプルであった。



摘要

ERBORE クシ系農牧民

HAMAR オモ系農牧民

ARI オモ系農耕民

図1 エルボレとその近隣民族

雨季の氾濫 (*heeron*) 期には、川の片方の岸だけでも、幅50メートル、時には100メートルにもわたって冠水する。そしてこの氾濫の期間は、2か月から3か月にわたる(図2)。

エルボレのテリトリーの大半は、マメ科の灌木のまばらに生えるサバンナであるが、ウェイト川の兩岸は、幅1キロにわたって川辺林により覆われている。この川辺林を、エルボレは *del* と呼び、サバンナ (*afai*) への遷移地帯をなす疎開林を *kora* と呼んでいる。後にみるように、サバンナではウシの牧畜が、川辺林では河川の季節的な氾濫

月 名	季 節 名	ウェイト川 (Limo)の氾濫	モロコシの 播種と収穫
1 <i>garumaro</i>	<i>mar</i> (dry season)		収穫
2 <i>grandar</i>			
3 <i>bichiet</i>			
4 <i>chamsa</i>	<i>guh</i> (big rain)		播種
5 <i>lee warigau</i>			
6 <i>kott</i>			
7 <i>haratta metett</i>	<i>mar</i> (dry season)		収穫
8 <i>haratt duddai</i>			
9 <i>hagai te metett</i>			
10 <i>hagai duddai</i>	<i>hagai</i> (small rain)		播種
11 <i>harmodda ele</i>			
12 <i>harmodda hurut</i>			

図2 氾濫原農耕の生業暦

を利用した氾濫原農耕が行われている。

2. 言語・社会

エルボレ語は、クシ語派、東クシ語の中の低地東クシ語群に分類されており、近年の研究ではことに、トゥルカナ湖の北岸に居住するクシ系農牧民ダサネッチ (Dassanetch)、および南東岸に居住するクシ系漁撈民エルモロ (Elmolo) との近縁性が指摘されている。19世紀の前半頃にはおそらく、これらの祖語を話す民族が、トゥルカナ湖北岸からステファニー湖北岸にかけて分布しており、その後サンプル (Samburu) の北上、早魃や牛疫の流行、トゥルカナ (Turkana) のレイディングなどのため東西に分断されたものと推定されている [HAYWARD 1984]。

エルボレは現在、北をクシ系農牧民ツァマイ (Tsamai)、西をオモ系農牧民ハマル (Hamar)、東をクシ系牧畜民ボラナ (Borana) と接している。ツァマイ、ボラナとは、その隣接地域では通婚関係をもつが、ハマルとは互いにレイディングをしあう敵対関係にある。

エルボレは、ふたつの大地域集団から成っている。ひとつは北方に居住する集団で、

南方の集団からアルボレ (*Arbore*) と呼ばれている。アルボレはさらにガンダラブ (*Gandarab*) とクラマ (*Kulama*) に二分される。ガンダラブはエルボレの居住地域の北端、ウェイト川の西岸に位置し、戸数約200、エルボレの集落中最大のゴンドロバ (*Gondoraba*) という定住集落に、クラマは東岸に位置するビルビロ (*Bilbilo*) という定住集落に居住する地域集団である。さらにゴンドロバの北方約6キロほどのところには、エルボレ語ではクイレ (*Kuile*) ツァマイ語ではガンダ・ボゴルキロ (*Ganda Bogolkilo*) と呼ばれるツァマイの首長村落があり、そこにはゴンドロバから移住し、ツァマイの首長筋と姻戚関係を持つエルボレの集団が居住している。

もう一方の南に居住する集団は、北方集団からマルレ (*Marle*) と呼ばれている。マルレはムラレ (*Murale*) とエグテ (*Egute*) という二集団から成っている。マルレはかつてはステファニー湖北岸のスラ (*Surra*) 地域に分布していたが、ハマルとの戦闘の後に、ウェイト川の東岸にあるニャチャ (*Nyacha*) という集落に移動し、現在に至っている。

ガンダラブおよびクラマの地域集団にはそれぞれ、カウォット (*kawot*) と呼ばれる首長がいる。これらのカウォットは降雨儀礼をつかさどり、その力能はエルボレのみならず近隣のボラナの崇敬も集めている。

これらのいくつかの地域集団を貫いている共通の制度が、ジム (*jim*) と呼ばれる年齢階梯制である。現在ジムには上から順に、オッバルシャ (*obbarsha*)、ギダマ (*gidama*)、マロレ (*marole*)、ワターニア (*wataania*) という4つの階梯がある。

3. 生 業

エルボレの生業は、ウシ、ヤギ、ヒツジの牧畜と、モロコシ、トウモロコシを主とする農耕から成っている。牧畜を担うのは、年齢階梯ワターニアに属する若者である。彼らは数人でフリッチ (*furich*) と呼ばれる牧畜キャンプを作り、数十頭のウシ、ヤギ、ヒツジとともに暮らす。数日から数週間一か所にとどまり、周辺の牧草を食べ尽くすと、新たな放牧地を求めて移動する。定住集落の周囲に広がるサバンナには、このようなフリッチがいくつも、新たな牧草を求めて遊動している。

エルボレにとってウシは、大きな社会的価値を持っているが、実際の食生活をみると、ミルクやバターなどの乳製品をひんぱんに利用する点を除けば、家畜の占める割合は、それほど大きいとは言えない。むしろ彼らの食生活は、モロコシやトウモロコシのような穀物に依存している。そしてこれらの穀物の大半は、季節的な河川の氾濫によって冠水する、川辺林のなかに開かれた畑からもたらされるのである。

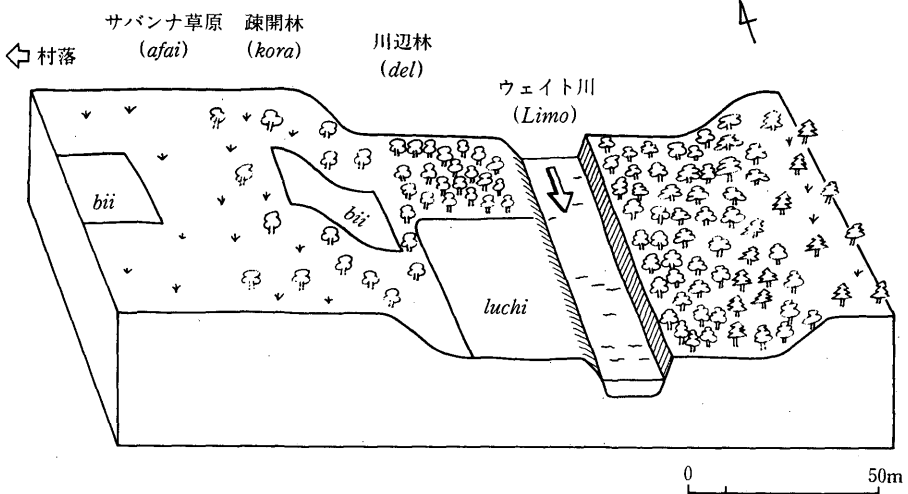


図3 ウエイト川周辺の自然環境

エルボレは耕作地を、ビー (*bii*) とルチ (*luchi*) に分類している。ビーは、サバンナ (*afai*) に作られ、2年から3年で遷移する天水利用の耕作地、および疎開林 (*kora*) に開かれ、不定期に冠水する耕作地を指す。ビーは年間の収穫が1回にすぎず、規模からいってもエルボレの農耕活動において占める重要性は小さい。これに対してルチは川辺林 (*del*) の中に開かれ、ウエイト川の季節的な氾濫によって定期的に冠水する耕作地である。川の氾濫によって、上流から黒色の肥沃な沖積土 (*konon*) がもたらされる。そのためルチでは、少なくとも年に2回、年によっては3回の収穫が可能である。エルボレの農耕活動は、この定期的な冠水地を主要な舞台として展開されているのである (図3)。

ルチで栽培されている作物は、モロコシ (*rub*)、トウモロコシ (*game*)、ササゲ (*ham*)、カボチャ (*bote*)、ヒョウタン (*kalu*)、ワタ (*futa*) である。これらの作物は、川の氾濫の引く年に2回の乾季に、播種と収穫が行われる。作付面積からみるとモロコシとトウモロコシが最も広範に栽培されており、なかでもモロコシは多様な品種を擁するという点で、他の作物とは際立った相違を示している。

エルボレのモロコシ栽培

1. モロコシの利用法

モロコシは多目的な作物である。さまざまなやり方で調理されるだけでなく、儀礼や建築材料にも使用される。

(1) 食用 未成熟の穎果は、そのまま軽くあぶって食される。成熟した穎果は粉に引き、それに湯を加えてポリッジ (*buuru*) にしたり、ホットケーキのような形のパン (*lassa*) に焼いて食される。また発酵させてビール (*farso*) にする。糖分を含んだ茎は、表皮をむいて生のまま噛む。

(2) 儀礼用 一般の世帯のモロコシの播種に先立って、*gababo* という品種のモロコシが、首長により播種される。またこの品種のモロコシは、新生児の授乳前に行われる儀礼 (*herdodussin*) でも、コーヒーにいれて新生児に与えられる。

(3) その他 生の茎は、家畜の飼料に用いられる。また乾燥した茎は、出作り小屋の屋根や側壁を葺くのに用いられる。

2. モロコシの栽培

河川の氾濫が引くと、冠水によって沖積土のもたらされた耕作適地 (*luchi*) が、各世帯に分配される。ルチの各世帯への分配は、ムラ (*murra*) と呼ばれる幾人かの長老たちの合議によって決定される。現在ゴンドロバでは7人のエルボレが、ツァマイの首長村落では3人のツァマイがムラとなっている。ルチは世帯単位で耕作されており、それぞれの耕作地は、サーバン (*saaban*) と呼ばれる数本の杭を目印として打つことによって、となりの畑から区別される。川岸から数十メートル奥まった所にある小高い河岸段丘 (*dibbe*) が定期的な冠水地を区切っており、その河岸段丘の上に、畑を見下ろすようにして出作り小屋 (*bara*) が作られている。また耕作地の中央部には鳥追いのための見張り台 (*konna*) と、穀物の乾燥台 (*doru*) が作られる (図4)。

さて、河川の氾濫が引き、各世帯に耕作地が分配されると、モロコシの播種が行われる。男が数十センチ間隔で掘り棒によって穴を掘り、そこへ女が一握りの種を蒔いて行く。いく度かの除草の後、出穂し、穎果が結実すると、鳥追いが始まる。穎果が

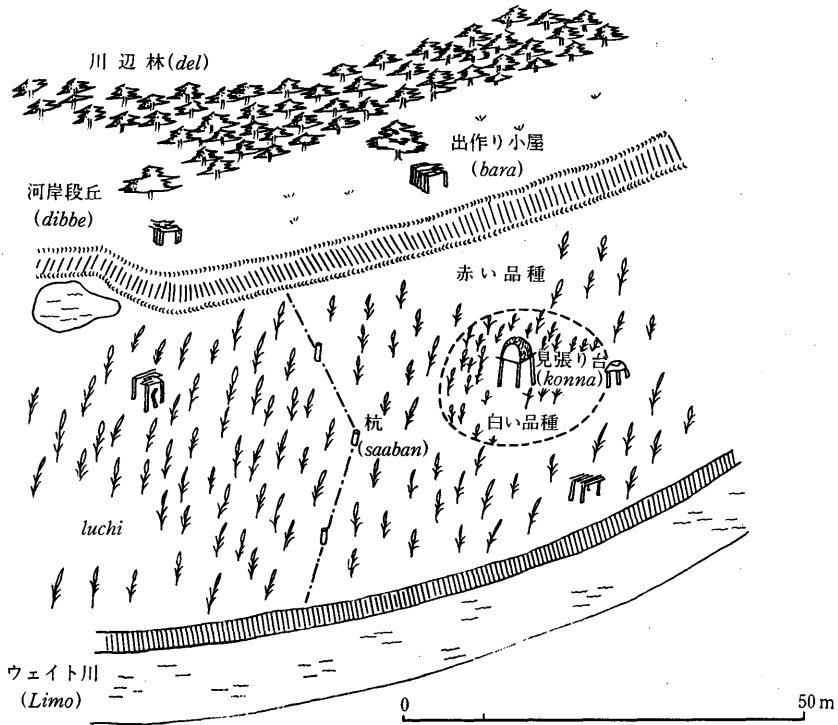


図4 冠水耕作地 (luchi) の見取図

熟すと、まず最初に熟した穂をいくつか翌年の播種用に保存しておく。それまでは、その畑に生えているモロコシを他者に分け与えてはならないとされている。その後残りの穂が収穫され、耕作地にある乾燥台の上で乾燥される。エルボレは、モロコシの1回目の収穫でとれる穂をゴス (gos), その収穫後の茎から出穂する穂をチャカリ (chakali), さらにその収穫後の茎から出穂する穂をアカ (aka) と呼び、いずれも食用に用いている²⁾。ただしアカは、もっぱらビールの醸造用に用いられる。

3. モロコシの品種名と知識の社会的配分

ツァマイの首長村落ガンダボゴルキロ、およびゴンドロバで、28人のエルボレから自分の畑 (luchi) に作付しているモロコシの品種名と、そのほかに知っている品種名をあげてもらった³⁾。インフォーマントはいずれも、年齢階梯ワターニア以上に属する成人の男性13人、女性15人である (表2)。

2) 字義通りには、“gos”, “chakali”, “aka” はそれぞれ、「播種」, 「若芽」, 「祖母」を意味する [HAYWARD 1984]。

結果は表3の通りである。この表は、品種名が、言及される頻度の多い順に上から下へ、インフォーマントが、言及品種名の多い順に左から右へと並べてある。

(1) 想起された品種

28人が言及した品種名は、のべ407、計61品種にのぼった。一見して明らかのように、品種によってその知名度には大きな差

がある。28人全員に知られているのは、ガバボ (*gababo*) という品種のみ、半数以上の人々によって言及された品種も、11品種である。逆に61品種のおよそ3分の1にあたる23品種は、一人のインフォーマントによって言及されているにすぎない。

(2) 品種に関する知識の社会的な配分

最も多くの品種名をあげたのは、最年長の年齢階梯オッバルジャに属する男性で、25種の品種名をあげている。最も少なかった者でも9種の品種名をあげており、平均で14.5、最頻値は16である。

ところで、品種名の認知に関して、性別・年齢による差が見られるだろうか。

モロコシの播種と、種子の保存は女性が行う。だから、エルボレの男性の何人かは、モロコシの品種については女性の方が詳しいと語った。けれども実際は、耕作地で作物の栽培に携わる男性の姿を見かけることは多い。今回の調査でも、男性のあげた品種数の平均が14.5、女性が14.6で、差は見られない。

表4は、インフォーマントを左から年齢階梯に基づいて降順に並べたものである。

表2 インフォーマントの年齢と性別

年齢階梯 (年齢)	性別		計
	男	女	
<i>obbarsha</i> (51-60)	4	3	7
<i>gidama</i> (41-50)	2	6	8
<i>marole</i> (31-40)	3	3	6
<i>wataania</i> (21-30)	4	3	7
計	13	15	28

3) エルボレのモロコシの品種名は、単音節から成るものと、複音節から成るものがある。

1) 単音節から成る品種名のほとんどは、それ自体では意味のない音節である (eg. *gababo*, *losuro*, *dinta* など)。ただし、それが由来した民族名を表すものや (eg. *murso*, スルマ系農牧民 *Mursi* より伝来)、他の言語においては意味のある複音節となるもの (eg. *akamachi*, 隣接するクン系農牧民 *Tsamai* の言語で, *aka ma acchi* (Where did he go?) を表す) も少数含まれる。

2) 複音節から成るものには、a. 単音節の品種名に、その品種の形状を表す修飾語を付加したもの (eg. *adi ya kunma* 「短い *adi*」, *emado bora* 「赤い *emado*」など)、b. その品種をもたらしたり、その品種が生じた畑の所有者の名前を付加したもの (eg. *emado iya baje* 「*Baje* の父の (畑から生じた) *emado*」, *emado tsagae* 「*Tsagae* のもたらした *emado*」など)、c. その他の単語 (その品種の形状を連想させるものか?) を付加したもの (*emado enokk* 「子ヤギの *emado*」など) がある。

品種名の中には、*emado* という語を含むものが多く見られる。これらの品種は、“*emado*” という単一の品種から派生したものとも考えられる。けれども後にみるように、他民族からもたらされたものの中にも、*emado* という語を冠する品種は多い。あるいは *emado* という語は、何らかの特徴を共有する品種に冠せられているのかもしれない。

これを見ると、最年長のオッパルシャ（推定年齢51-60才。以下同。）のあげた品種数の平均が15.6，以下順にギダマ（41-50）14.6，マロレ（31-40）12.2，ワターニア（21-30）15.4となっており、マロレに属するもののあげた品種数が少ない点を除けば、顕著な違いは見られない。けれども言及している品種名に注目すると、年代による明らかな違いが目につく。マロレ、ワターニアの若年世代のあげた品種は、言及頻度が5以上の知名度の高い品種に集中しているのに対して、オッパルシャ、ギダマの年長世代は、言及頻度4以下の、あまり知名度の高くない品種に言及する割合が顕著になっている。年長世代によってのみ言及される知名度の低い品種群は、あるいはかつては栽培されたけれど、現在では失われてしまい、若年世代の目に触れることのない品種を多く含んでいる可能性が考えられる。たとえば品種番号31の *gaugau* は3人のインフォーマントによって言及されているが、現在では誰も栽培せず、種子もなくなってしまったという。

（3）実際に栽培されている品種

最も多くの品種を栽培している者で9種、最も少ない者で3種、たいていの者は5種から6種の品種を1筆の畑に栽培している。品種の認知と異なり、実際に栽培している品種数は、インフォーマント間で大きな差はない。品種別に見ると、1. *gababo*（品種名の前の数字は品種番号を示す。以下同。）が飛び抜けて人気があり、28人中27人が栽培している。けれどもこの品種を含めて10人以上によって栽培されている品種は5品種だけ、逆に61品種の半分以上にあたる32品種は、少なくともこの28人のインフォーマントの中では、名前によってのみ知られているにすぎない。

以上から明らかなように、品種によりその知名度、栽培頻度には顕著な差が見られる。一方では多くの人に知られ、また栽培されている少数の中核的な品種群がある。他方では、少数の人にしか知られず、ほとんど栽培されることもない多くの周辺的な品種群がある。さらにいく人か年長世代によって想起された周辺的な品種の中には、現在では全く栽培されず、種子も失われて系統の絶えてしまったものもいくつか含まれている。このことは、後に明らかにするように、エルボレのモロコシの品種が置かれている、選抜と淘汰の過程を表しているのである。

4. 品種を弁別する基準

次にこれらの品種を弁別する基準について考えてみよう。

栽培植物の品種の認知と選択に関して、色彩や形態、大きさなどの外面的な特徴の

重要性が報告されている [BOSTER 1985a; 重田 1988]。ことに色彩のように、適応的な（あるいは実用的な）価値とは無関係であり、かつ人に知覚されやすい形質は、大きな変異を示すことが予想される。また品種が多様になるにつれ、いくつかの異なった次元の外面的な特徴を組み合わせることによって、品種の弁別が行われるようになる [BOSTER 1985a]。

モロコシでは、花序の形状、穎果の色、茎の長さなどがこうした外面的な特徴としてあげられるだろう。それではエルボレのモロコシは、このような点において、幅広い変異を示していると言えるだろうか。またそうした外面的な特徴が、品種弁別の基準として機能していると言えるだろうか。

結論から言えば、エルボレのモロコシの形態的な変異の幅は、その多様な品種数に比べれば、狭いものに思われる。またそうした特徴が、品種弁別の基準として、必ずしも十分に機能しているとは見ることができない。以下順に、花序の形状、穎果の色、茎の長さについて、エルボレのモロコシの示す変異を見てみよう。

1) **花序の形状** モロコシの花序の形状は、穎果の大きく散開したシャッターケイン型から、散開型、堅穂型、そして緊密に密集した密穂型まで、連続的な変異を示す。また散開した形が対称か、非対称か、さらに成熟すると花序が垂れ下がる（鴨首型）か否かも、形態的な弁別基準としてつけ加えることができるだろう。

筆者がエルボレで収集した21種のサンプルのうち、18種が堅穂型、3種が密穂型であった。インフォーマントによれば、エルボレには散開した型や、鴨首型の品種はないという。モロコシの花序のとりうる形態を考えるならば、エルボレのモロコシの花序の形状は、変化に乏しいと言えるだろう。

2) **穎果の色** エルボレの人々が最も注意を払うモロコシの外面的な特徴が、穎果の色である。エルボレには10を越える豊富な色彩語彙があるが⁴⁾、著名な品種であり、

4) 98色の色彩カードを用いて、6人のインフォーマントから確認したエルボレの主要な色彩語彙には、以下のようなものがあつた。

1. <i>burida</i>	red	7. <i>remada</i>	pale purple
2. <i>borida</i>	bright yellow orange	8. <i>niroda</i>	deep yellow orange
3. <i>ilida</i>	green/blue	9. <i>moramoracha</i>	yellow
4. <i>janada</i>	pale blue purple	10. <i>mulgada</i>	purple
5. <i>watida</i>	black	11. <i>magala</i>	dark red purple
6. <i>ezida</i>	white		

Hayward のエルボレ語の語彙集には、このうち1から6までが形容詞 (*janada* は grey に相当するとされる) として、9 が黄色のものを指し示す名詞、10 が暗褐色のものを示す名詞、および形容詞として記載されている。今回の調査では、それぞれの語彙の指示範囲を区別する弁別特性や、語彙全体の体系性を明らかにするまでに至らなかったが、この結果からだけでも、エルボレの色彩語彙の豊かさと複雑さは十分に予想できる。

なおかつその穎果の色彩をエルボレ語で適切に表現しえぬ場合は、近縁のダサネッチ語を用いて表現しようとしたりする。また一見して同じ色の穎果に見える場合も、その穎果のつけねの部分の色の相違を、品種の弁別の基準として示したりする。

エルボレのモロコシに見られる穎果の色は、赤 (*burida*)、オレンジ (*remada*)、薄いベージュ (*borida*)、白 (*ezida*)、灰色 (*janada*)、ピンク (*borach* Dassanetch 語)、そしてこれらのいくつかの色彩の混合である。このように穎果の色は、花序の形態よりもはるかに変化に富む。しかし、多数の品種すべてに対応するほど、十分な色彩の変異があるわけではない。なかでも、白色の品種は多数にのぼり、異なった名称を与えられているこれらの品種を色のみによって分類するのは困難である。

3) 茎の長さ モロコシの茎の長さは、長い (*derida*) か短い (*kumida*) かの二分法で示される。16サンプル中9種が茎の長い品種である。

さてこのように、エルボレのモロコシは花序の形態の変化に乏しく、また穎果の色彩も品種を弁別するのに十分ではない⁵⁾。そのために、ことに数の多い白色の品種の場合、花序のサンプルのみを示しても、その品種名を識別することが、エルボレ自身にとって困難であることが多い。

以上、品種を規定する指標として、視覚的に認知が可能な外面的特徴について検討してきたが、次に品種の持つ内在的な性質について見てみよう。

エルボレは、それぞれの品種の内在的な性質についてよく知悉している。表5に、味、成長の早さ、茎の甘みについて、それぞれの品種の持つ特徴を示しておいた。このほかに、やせた土地での成長力、鳥害の受けにくさ、収量の多寡、収穫後の乾燥の早さ、粉にひいたときの量および色、調理法などが、しばしば言及される性質である。

これらの内在的な性質として言及されるものは、いずれも実用上の基準と結びついたものである。表5では、それぞれの次元が、まるで穎果の色のように、価値中立的な分類の指標のように見えるかもしれない。しかし、実際にそれぞれの品種についてエルボレの人々が語る場合は、その特徴として、いくつかの内在的な性質の次元の中で、その品種が優れた特性を示すものについてのみ言及する。たとえば、A という品種は鳥害を受けにくい、B という品種はやせた土地でよく育つ、C という品種は収量が多いといったぐあいである。またこうした性質がさらに、調理法や一年の食生

5) エルボレにおけるモロコシの形態的な変異の狭さが、どのような理由によって説明されるのかについては、今回の調査では明らかにすることができなかった。これについては、他地域からの品種の導入や、野生種と栽培種間の交雑の可能性など、特定地域の栽培種集団を越えた、遺伝子の交流の実態を調査することにより、今後明らかにすることができるかもしれない。なお、モロコシの野生種と栽培種間の交雑については、竹井恵美子がスーダン南部の事例を報告している [TAKEI 1984]。

表5 モロコシの品種とその特徴

品種名	花序の色	花序の形状	茎の長さ	成熟の早さ	穀粒の味	茎の甘み	備 考
1. <i>gababo</i>	赤色	堅穂型	長い	早生	苦い	甘い	最もホビュラーな「赤い」品種。鳥害に強い。唯一儀礼に用いられる。
2. <i>akado</i>	灰色	堅穂型	短い	極早生	苦い	—	鳥があまり食べない。
3. <i>losuro</i>	白色	堅穂型	長い	中手	美味	甘い	「白い」品種。
4. <i>dinta</i>	白色	堅穂型	短い	中手	美味	甘い	「白い」品種。
5. <i>organte</i>	薄オレンジ	堅穂型	短い	極早生	苦い	—	やせた土地でよく育成する。
6. <i>emado ya merkowa</i>	白色	堅穂型	短い	中手	美味	甘い	「白い」品種。品種名は「メルコワの父の(畑の)エマド」の意味。
7. <i>kurkurich</i>	灰色	堅穂型	長い	早生	美味	甘い	
8. <i>gaabo</i>	薄オレンジ	堅穂型	長い	中手	苦い	甘い	
9. <i>emado</i>	白色	堅穂型	短い	極早生	美味	—	「白い」品種。エマドの名を冠する品種は多数にのぼる。
10. <i>bongwadi</i>	白色	堅穂型	短い	極早生	美味	甘い	「白い」品種。
11. <i>kolme</i>	白色	堅穂型	長い	中手	美味	甘い	「白い」品種。
12. <i>harich</i>	薄オレンジ	密穂型	長い	晩生	美味	甘い	穎果が大きく鳥が食べない。乾燥が早い。ダサネッチより。
13. <i>emado bura</i>	オレンジ	堅穂型	短い	中手	美味	甘い	「赤いエマド」。ダサネッチ由来。
14. <i>garaite</i>	白色	堅穂型	長い	中手	美味	甘い	
16. <i>waakole</i>	白色	堅穂型	長い	晩生	美味	甘い	
24. <i>nongolebok</i>	ピンク	密穂型	長い	中手	美味	甘い	密穂型の花序。ダサネッチ由来。

活におけるそれぞれの品種のもつ重要性に結びつき、複合的な認知を形成し、その品種に一種の個性を与えている。

このように、モロコシの品種、ことに認知度の高い品種は、外面的特徴と実用性に基づいた内在的性質の組み合わせによって認識されているのである。

さて、品種レベルでの弁別の基準をはなれ、より大まかなモロコシの分類についてふれておこう。

人々は、モロコシを大別してふたつのカテゴリーに分けている。ひとつは赤い品種、もうひとつは白い品種である。赤い品種は1. *gababo* と呼ばれる品種で、エルポレのほとんどすべての世帯で栽培されている、最も代表的な品種である。白いものには、3. *losuro*, 4. *dinta*, 6. *emado ya merkowa*, 9. *emado* などいくつかの品種が含まれている。赤い品種である *gababo* の特徴は、表皮に含まれているタンニンのせいで、

その粒の味が少々苦いことにある。このことは、次のふたつの利点をもたらすという。ひとつは、その味のため、少なくとも十分に成熟した赤い品種は、鳥害にあうことが少ないこと。ふたつ目は、人々も同様にたくさん食べることがないために急激に消費されることがなく、したがって作物の端境期には最も重要な食料となるということである。それに対して白い品種は、粒の味は良いけれども鳥害にあいやすく、また人々によってもすぐ消費されてしまう。

赤い品種と白い品種群という、この大きなカテゴリーへの分類法の特徴は、外面的な弁別特性の対立と、その背後にある内在的、かつ実用的な性質の対立に一貫性を認めている点にある。これらのカテゴリーに含まれている品種は、エルボレの代表的な品種を含んでおり、この大まかな分類は、微細な品種レベルでの分類とは別に、品種に対するより簡便で実的な認知枠組みを提供しているものと思われる。けれどもこの分類にすべての品種が含まれるわけではなく、したがって品種レベルの分類の上位に位置する包括的な分類図式になっているわけではない⁶⁾。

品種多様化のダイナミズム

1. 品種の多様化と系統維持のメカニズム

エルボレのモロコシの品種の弁別には、視覚的に認知可能な差異だけでなく、内在的な性質の差異も関与している。それならば、このような微妙な差異を持つ多数の品種群を、エルボレの人々はいかにして擁するに至ったのだろうか。また種子繁殖の作物であるモロコシは、そのまま放置するならば、他との交雑によって系統の遺伝的純粋性を喪失しやすいものと思われる。それならば逆に、これらの多様な品種群は、その差異を保持したまま、いかにしてその系統を維持してきたのだろうか。ここでは品種の多様化と系統維持が、どのようなメカニズムによって満たされてきたのかについて明らかにする。

ひとつの共同体における栽培植物の品種の多様化の契機には、外部からの新品種の導入、および在来種からの新品種の創出（交雑と突然変異）というふたつの可能性が考えられる。

6) 同様に果皮に含まれるタンニンの量の多少によって、モロコシの品種群をふたつのカテゴリーに分類する事例を、重田はエチオピア西南部の高地農耕民アリから報告している【重田1990】。

(1) 在来種

代表的な品種のいくつかは、もともとからのエルボレの在来種であるといわれる。かつて森に狩猟に行った祖先が、象の糞からモロコシが生えているのを見つけ、それを持ち帰ったのがエルボレのモロコシ栽培の始まりであるという伝承が伝えられている。これに含まれる品種は、1. *gababo*, 4. *dinta*, 5. *organte*, 8. *gaabo*, 11. *kolme*, 14. *garaite* などである⁷⁾。

(2) 外部からの新品種の導入

いくつかの品種は、外部から持ち込まれたものだといわれる。最も多いのがダサネッチからもたらされたといわれる品種である。12. *harich*, 13. *emado bura*, 18. *bun*, 21. *burnaaso*, 24. *nongorebok*, 41. *berten* などがこれに含まれる。他にハマルからもたらされたとされる品種 (27. *ugamo*, 37. *udu*, 59. *sula*, 60. *kerra*)、ムルンからもたらされたとされる品種 (61. *murso*) がある。ダサネッチとエルボレは言語的に近縁であり、かつては共通の祖語を話す民族から分岐したものと推測されている。また現在でも通婚関係を持っている。これに対してエルボレとハマルは敵対関係にあり、レイディングのさいにモロコシを持ち帰ったといわれている。エルボレはツァマイ、ボラナとも通婚関係を持つが、これらの民族からもたらされたモロコシの品種は確認できなかった。またコンソなどの高地農耕社会からもたらされた品種も知られていない⁸⁾。エルボレのモロコシの品種の導入がもっぱら西南部の低地からなされていることは、現在のエルボレのモロコシの品種の大半が、西南部ナイル系の牧畜文化に由来する *caudatum* であることから推測できることである。

(3) 新品種の創出

在来種、および外部から導入された品種は、エルボレのモロコシの品種の一部にすぎない。むしろ他の多くの品種は、エルボレの社会内で選抜育種されてきたものである。

すでに述べたように、エルボレでは一筆の畑地に平均して約5品種のモロコシを植えている。播種はウェイト川の氾濫が引いた後に行われる。男が数十センチ間隔で掘り棒で穴を掘り、女がそこへモロコシの種を蒔いてゆく。この際、同一の品種のモロ

7) それぞれの品種の由来についての情報は、インフォーマントによって若干のくい違いが見られる。ここではそれらの中で、最大公約的な品種名をあげてある。

8) 民族間における栽培植物の品種の交流の実態については、いまだに不明な点が多い。今回の調査地はエルボレのテリトリーの西端に位置しているが、東側のボラナとの隣接地域では、あるいは異なった結果が出るかもしれない。また、高地社会からもたらされた品種が見られないのは、生態的環境に対する適応性の問題が関連しているのかもしれない。

コシは必ず同じ穴の中に、一定の区画内にまとめて蒔かれる。いくつかの異なった品種のモロコシを同じ穴の中に、あるいは一定の区画内に混ぜて蒔くということは、絶対に行われぬ。ここで仮に、同一の品種を一定の区画内にまとめて栽培することを、「区画化」(segmentalization)と呼ぶことにしよう。

区画化にはいくつかの実理的な理由がある。ひとつは鳥害を避けるためで、鳥の好む白い品種は畑の中央、見張り台の回りに植えられ、鳥の好まない赤い品種はその周囲に植えられる。また見張り台からの見通しをよくして鳥害を防ぐために、茎の丈の等しい品種は同じ場所に植える。また冠水の期間が短く、土地のやせた場所には、成育期間が短く、早く熟成する品種を選んで蒔く。このように植えつけにおける品種ごとの区画化は、鳥の駆除のためなど、人々の意識的な目的に沿って行われているが、それが他方では、在来の品種の系統維持と、新たな品種の創出を可能にする基盤を提供している点も見逃せないだろう。

初穂が実ると、エルボレの女は、自分の畑にあるそれぞれの品種からいくつかずつ、翌シーズンの播種用の穂を集める⁹⁾。これらの初穂が集められる前には、いくら穂が十分に実っていても、その畑から他者にモロコシを与えてはならないといわれている。播種用の穂は、家の前で十分に乾かされてから、異なった品種どうしを混ぜないようにして、保存される。収穫時に、同一の品種の植えられている区画から、その品種とは異なった外面的特徴を持つモロコシが発見されることがある。それをエルボレは、ヨーフォ (yoofō) と呼ぶ。字義通りに訳せば、「突然」という意味になる。エルボレはモロコシの品種間で交雑の生じることを否定しており、ヨーフォとは元の品種から派生した、文字通りの「突然変異」であるとみなしている。ヨーフォが発見されると、新たな品種名が付与され、他の穂とは区別して、大事に取っておかれる。そして、翌シーズン、他の品種と同様にして、一定の区画に播種される。播種から収穫の間を通じて、この新たな品種の性質は注意深く検討される。検討されるのはもはや外見的特徴ではなく、成育期間の長さ、粒の量や味、鳥害や虫害への耐性など、実用的な性質である。このような検討を経た後に、この新種に多くのメリットが認められた場合、翌年も続いて播種され、在来種のひとつになる。逆にメリットの認められなかった場合、種子はその年のうちにすべて消費されてしまい、品種は消滅することになる。実用性において優れた品種はまた、広く人々の間に普及する。それに対して、実用性に

9) 初穂を翌シーズンの播種用にとっておくという慣習は、エルボレのモロコシの品種全体に対して、早熟性の方向へと淘汰圧をかける自動選択 (autoselection) として機能していると思われることができる。

において劣った品種は、普及の度合いも少ない。表3における品種による人々の言及頻度、及び栽培頻度の相違は、品種の多様化の以上のようなプロセスの断面を示しているものと考えても間違いはないだろう¹⁰⁾。

2. 認知選択と実用選択

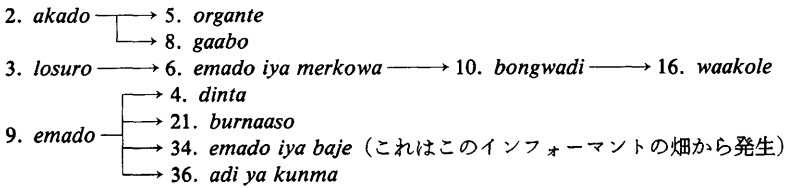
ここで「区画化」の、品種の多様化と系統維持に対して持つと思われるいくつかの

10) エルボレ内で創出した品種についても、在来種や他地域からの導入種と同様に、人々の間にある程度共通の知識が共有されているだろうか。幾人かのインフォーマントに、品種間の発生過程についてたずねた結果、次のふたつのタイプの答を得た。

ひとつは、品種間の発生関係を、歴史的・不可逆的な過程とみなすものである。

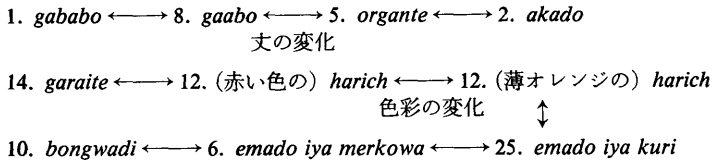
【事例1】年齢階梯マロレ・男性

(矢印はある品種から他の品種が発生したことを表す)



二番目は、品種間の発生関係を、循環的・可逆的なものとみなすものである。

【事例2】年齢階梯ワターニア・男性



少なくとも個人的には、品種相互間の発生関係について、何らかの知識がもたれていることは確実である。ことに事例2に見られるような、品種間の発生関係を循環的なものとみる認識は、「民俗遺伝学 (folk genetics)」の萌芽を感じさせる。またこの事例では、品種間の関係に、茎の丈の長短、花序の色彩など、外面的な特徴の変化を対応させている点も興味深い。けれどもこれらの情報は、在来種や他地域からの導入種に関する情報にくらべ、はるかに不一致が多い。さらにこのような知識は、あくまで個人的な観察に基づくものであり、親子間においても大きな見解の相違がある。このことは、エルボレの人々がモロコシの品種に対してはらう注意が、まずもってその場その場の実用的な関心に基づくものであることを反映しているからだと思われる。(これとは逆に、シンボリックな意味をもつ牛の毛色の多様化の背後に、一貫した遺伝観を認識している事例が、スルマ系農牧民 Bodi の調査から報告されている【福井 1988】。なお筆者のインフォーマントによれば、牛の毛色に関する同様の遺伝観は、エルボレにも存在するという。) また新種の発生が突然変異だけでなく、品種間の交雑によって生ずる可能性が高いことを考えるならば、こうした図式が長年にわたる検証に耐えるものでないということも考えられる。けれどもこのような知識が、品種の選抜になんらかかわりを持っていない、というわけではない。少なくとも循環型の知識を持つ人々は、その図式に当てはまるような形状をそなえた新種を見いだした場合、それを既存の品種とみなして、保存せずに消費してしまうという。すなわちここでは、以上のような図式が、品種の多様化を妨げる方向へと機能しているのである。

機能について、ふれておこう。

モロコシの栽培における品種ごとの区画化は、鳥害の防御や品種と地味の相性の斟酌など、より多くの収穫を目的とする実用的な目的意識に基づいて行われている。そうした意味では、品種の維持と多様化という要件に対する区画化の持つ機能は一般的にあって、潜在的なもの、すなわち、人々には取り立てて意識されていないものだといっても良いだろう。

区画化の果たす第一の機能は、変異の発見を可能にする認知的な地を提供することにある。ここで品種の維持にしても、多様化にしても、いずれもそれが、人間の認知的な分節化の営為を通してなされるものであることに留意する必要がある。すなわち、Aと非Aの種が異なっていることを認知することがまず必要なのである。そして、非Aを常に排除し続けるならば、それは結果として品種の系統維持となり、それを取り込んで別の記号を付与すれば、品種の多様化につながる。品種の区画化は、AならばAという品種を集めることによって、そこに非Aが現れたときの、微細な形態的差異の認知のための背景を提供している。以上のような意味で、区画化は、系統維持と多様化がなされるための要件である、人間の認知的な分節化の行為を可能ならしめる条件を満たしていると言える。

第二に、区画化によって、品種間のランダムな交雑をある程度阻止していると考えられる。

最後に、区画化は、同一の視覚的な特徴を持つ品種を複数創出させる可能性を持つ。区画化による差異の認知は、変異（ヨーフォ）と元の品種の1対1の対比によってなされる。そのため他の在来種に変異と同様な視覚的特徴を持つものがすでに存在しても、その変異は新種として認知される可能性が高いと考えられるのである。

このようにエルボレのモロコシの品種の多様化の出発点は、知覚的に識別可能な変異の発見にある。すでにキャッサバ、エンセータといった栄養体繁殖の作物について、品種の多様化の原動力としてこのような認知的な選択行為の重要性が指摘されている[BOSTER 1985a; 重田 1988]。重田はこのような、知覚的な差異の認識に基づく選択行為を「認知選択」と呼び、実用的な性質を選択の基準とし、品種の収斂をもたらす「実用選択」と対照させている。そして「認知選択」を「実用選択」の前提をなすものとしている。エルボレのモロコシの品種の選択過程を見ると、一見して認知選択と実用選択の2重構造をなしているように思われる。

まず初めに、区画化されて成熟したモロコシの中から変異が見られたら、人々はそれを他の種子とは区別して取っておき、命名し、翌年に播種する。まずここで、認知

選択による品種の多様化のメカニズムが発動する。なおここでは異なった形態の種子を本来の在来種から隔離するために、品種の収斂という意味での実用選択のための要件も、すでに満たされているというべきだろう。次に翌年、新種のモロコシは、実用的な基準に照らしてその性質が判断され、取捨される。ここでは明らかに実用選択がなされていると言えるだろう。ここで、認知選択と実用選択の関係は、時間的な前後関係において、またそもそも選択という行為が人間の認知的な分節行為に基づいているという意味では、認知選択が実用選択に先行していると言える。けれども人々の実際の意識の上においては、認知選択は実用選択という目的に従属しているものと思われる。つまり、よりベターなものを見いだすために、とりあえず変わったものをとっておき、試してみているのである。

3. 実用選択の意味

実用選択が品種の収斂をもたらすとするならば、なぜ現在のエルボレには、多様な品種を見いだすことができるのだろうか。そして、これらの品種は近い将来、少数の有用な品種へ収斂してゆくと思われるべきだろうか。二番目の問から答えよう。答は否である。このことを考えるためにまず、どのような実用的な基準によって、人々が栽培する品種を決定しているのかを見ておこう。

すでに述べたように、エルボレでは一筆の畑地に平均して約5品種のモロコシを植えている。なぜ特定の品種を栽培しているのかとたずねたときに、最もしばしばあげられた理由は、鳥害に強い品種と弱い品種を組み合わせる必要があるというものである。このことは、前節で取り上げた「赤い品種」と「白い品種」の分類と関連している。すなわち苦みのある「赤い品種」 *gababo* は鳥害に強く、苦みがなく味の良い「白い品種」は、鳥害にあいやすいというものである。ことに人々が、鳥害による収量の減少に強い懸念を抱いていることは、栽培頻度の高い上位2品種 (1. *gababo*, 2. *akado*) がいずれも苦みを含む品種であることにも示されている。

表4から、実際に人々の畑には、赤い品種である *gababo* と、白い品種 (これには幾種類かのオプションがある)、それに幾人かの畑では痩せ地でも成育する品種 (5. *organte*) が組み合わせられて植えられていることが分かる。さらにこうした人々の実用的な目的に適応した品種が、知名度が高く、栽培頻度も高いモロコシの中核品種群を形成していることがわかるだろう。

さて、ここで注意しなければならないのは、ここで実用選択の基準として例示した相対立する特性、すなわち鳥害への耐性、および食味という基準は、必ずしも品種の

収斂に対して同一の効果を与えているように思われたいことである。鳥害に強い品種とされるのは、ほぼすべての人々によって栽培される *gababo* を除いて幾種類もなく、そこに強い淘汰圧が働いていることを予想させる。それに対して食味に優れた「白い」品種は多数存在する。これらはいずれもある程度の数の人々によって栽培されており、必ずしもこの基準にそった強い淘汰圧が働いているとは思われない。もちろんこれらの品種間にも成育期間を初めとして、いくつかの性質の相違が見られ、人々はそうした性質をよく知っている。けれども、はたして人々がこうした違いを強く意識し、その故に品種を選択しているかどうかは疑わしい。

このことは、周辺的な品種についてはより一層当てはまるように思われる。人々はなぜ幾種類もの品種を栽培するのかと問われたときに、必ずしもそれぞれの品種について、それが何らかの実用的な基準において独自の長所を持っているという意味での説得的な説明を提示するわけではない。強いてあげるならば、「父がそうしていたから」とか、「知人に請われたときに与えるため」といったような説明がなされる。

つまり、実用選択の基準は複数あり、いくつかの基準についてはハードルが高いが、他の基準はかなりの許容度があるのではないかと考えられるのである。もちろん品種が選択されるさいの基準についての実態を知るには、より周到な調査が必要であり、ここでは断定的な結論は避けねばならない。少なくとも今のところは、周辺的な品種群が実用的な基準から見て極端な劣性を示さず、実用上「許容範囲」にあるために、放棄されなかったのではないかと考えるのが妥当だろう。

結 語

エルボレのモロコシの品種は、少数の中核的な有名品種群と、それをを取り巻く多数の周辺的な品種群からなっている。

中核的な品種群は、いくつかの重要な実用上の基準において優れた性質を示し、多くの人々に優先的に選択されてきた品種である。これらの品種は相対的に、品種の維持という点から見て安定している。それに対して周辺的な品種群は、品種の維持という点ではより不安定である。この中には、何らかの理由で種子が失われてしまい、系統の絶えてしまうものもあるだろう。けれども他方でこの品種群には、個人の畑でオーフォとして発見された変異が新たな品種名を得て、常に組み込まれているのである。そしてこうした新種の中には、人々の間に普及し、中核的な品種群の一角に入るものもあるだろう。このような周辺的な品種群における品種の新陳代謝が、エルボレのモ

ロコシの品種の多様性を支えているのである。

中核的な品種は、鳥の食害への耐性に見られるように、人間にとって重要な適応的な価値を持つものであった。つまりこうした品種は、多くの人々によって必要とされる特定の実用的な価値に対する積極的な評価によって、栽培されるのである。(それと同時に、このような性質を持った品種は、農生態系 (agro-ecosystem) にかかる自然の淘汰圧のなかでも、生き残る可能性が高いだろう。) それに対して、周辺的な品種の多くは、むしろ複数の実用的な基準において、必ずしも劣っていないという理由のために、幾人かによって栽培され続けているのではないかと思われる。このことは必ずしもそれぞれの品種が、栽培者個人に対して積極的な価値を持っていないというわけではない。むしろ生態的、文化的には規定されない極めて個人的な価値観が栽培植物に対して分有される場合に、結果としてその社会における品種の多様性が保証されるということも考えられるだろう。そしておそらく、そうした価値観に基づく稀少種の栽培は、中核品種の強力な適応性にささえられて、初めて可能になるのではなからうか。

栽培植物の品種の多様化は、「自然」と「文化」のはざままで、その相互作用の結果として生ずる。けれどもここで「自然」、あるいは「文化」という言葉でくくられる事象の中には、さまざまな要因が含まれている。真に重要なことは、それらの諸要因を弁別し、その顕在的、潜在的な連関を明らかにしてゆくことである¹¹⁾。本稿はその一端を素描したにすぎない。「品種の多様化」というトピックは、その背後にある諸要因の連関の布置を考えるならば、なお多くの考究を待つ課題だと言えるだろう。

謝 辞

現地調査は、平成元年度文部省科学研究補助金 (海外学術調査) によるプロジェクト「北東アフリカにおける生業システムの比較研究：民俗モデルの構築とその適用の可能性」(研究代表者/国立民族学博物館 福井勝義)の一環として、1990年1月から3月にかけて、アディスアベバ大学エチオピア研究所 (Institute of Ethiopian Studies) の研究協力のもとに行われた。

11) どのような要因が考慮されるべきかは、経験的な問題である。本稿では取り上げなかったが、野生種から栽培種への浸透交雑 (introgression)、鳥の食害、病害などによる淘汰などが、重要な要因として思い浮かぶ。また、民族間における品種の交流や、一社会内におけるさまざまな慣習、そして価値観の及ぼす影響も、見落とすことのできぬものだろう。たとえばボディでは、*morare* (個人が一生になう色彩・模様。これは個人がアイデンティファイするウシの毛色が基盤になっている) と同じ色のモロコシを個人的に栽培するという (福井氏からの私信)。ただしこれが、色彩の変異を越えた広い意味での品種の多様化に対して、いかなる意味を持っているかは明らかではない。

本稿ができ上がるまでには、現地調査の段階も含め、さまざまな人たちのお世話になった。

理論社会学を専攻していた筆者を、エチオピア研究という未知の分野へ導いて下さったのは、プロジェクトの研究代表者、福井勝義博士である。博士には、フィールドワークのいろはから、実証的なデータでものを語ることの重要性にいたるまで、さまざまな面で身をもってご指導いただいた。家畜や栽培植物の馴化（domestication）の過程で見られる多様化（diversification）の問題について目を開いて下さったのも博士である。

また、福井博士を初めとする本プロジェクトの方々、ことにエチオピア班の稗田乃氏（大阪外国語大学）、重田眞義氏（京都大学アフリカ地域研究センター）、出口顕氏（島根大学）、松田凡氏（京都大学）とは、ともにエチオピアで調査をすることができ、さまざまな面で刺激や助言を得た。また現地では栗本英世氏（東京外国語大学アジアアフリカ研究所）にお世話になった。

ほとんど何の予備知識もなくエルボレの地を訪れた筆者が、とにもかくにも調査を遂行することができたのは、ひとえに調査助手を務めてくれた Jinka Secondary School の学生、Burra Kalo 君と Bala Gelcha 君のおかげである。エルボレ出身の彼らは、単に有能な通訳であっただけではない。誠実で辛抱強い彼らの態度のおかげで、未知の土地において直面するさまざまな日常的なトラブルにさいしても、筆者は、实际的、そして精神的な支えを得ることができた。

本稿の執筆にあたっては、国立民族学博物館の福井博士、および山本紀夫博士に、ていねいな御助言をいただいた。また福井博士の主催した共同研究「生態と文化の共生」には、共同研究員として出席させていただき、多くの刺激を得た。

最後に、さまざまな場において、重田眞義氏の議論から触発されることが大きかったことを記しておきたい。モロコシの品種の調査を思い立ったのも、氏の研究成果から受けた刺激によるところが大である。またこの分野では門外漢の筆者に、栽培植物に関する基礎知識についてもご教示いただいた。

以上、謝して記したい。

文 献

- ALTIERI, M. A. and L. C. MERRICK
 1987 In Situ Conservation of Crop Genetic Resources through Maintenance of Traditional Farming Systems. *Economic Botany* 41(1): 86-96.
- ANDERSON, E.
 1952 *Plants, Man and Life*. Boston.
- BOSTER, J. S.
 1984 Classification, Cultivation, and Selection of Aguaruna Cultivars of *Manihot esculenta* (Euphorbiaceae). *Advances in Economic Botany* 1: 34-47.
 1985a Selection for Perceptual Distinctiveness: Evidence from Aguaruna Cultivars of *Manihot esculenta*. *Economic Botany* 39(3): 310-325.
 1985b "Requiem for the Omniscient Informant": There's Life in the Old Girl Yet. In J. Dougherty, (ed.), *Directions in Cognitive Anthropology*, University of Illinois Press, pp. 177-197.
- BOSTER, J. S. and J. C. JOHNSON
 1989 Form or Function: A Comparison of Expert and Novice Judgements of Similarity Among Fish. *American Anthropologist* 91: 866-889.
- BROWN, W. L.

- 1983 Genetic Diversity and Genetic Vulnerability-An Appraisal. *Economic Botany* 37(1): 4-12.
- BRUSH, S. B., J. C. HEATH and Z. HUAMAN
1981 Dynamics of Andean Potato Agriculture. *Economic Botany* 35(1): 70-88.
- BUTZER, K. W.
1971 *Recent History of an Ethiopian Delta: The Omo River and the Level of Lake Rudolf*. The University of Chicago.
- DANIEL GAMACHU
1977 *Aspects of Climate and Water Budget in Ethiopia*. Addis Ababa University Press.
- DE WET, J. M. J. and J. R. HARLAN
1971 The Origin and Domestication of Sorghum bicolor. *Economic Botany* 25: 128-135.
- DE WET, J. M. J., J. R. HARLAN and E. G. PRICE
1970 Origin of Variability in the Spontanea Complex of Sorghum bicolor. *American Journal of Botany* 57(6): 704-707.
1976 Variability in Sorghum bicolor. In Harlan, De Wet and Stemler (eds.), *Origins of African Plant Domestication*, Mouton Publishers, pp. 453-463.
- DE WET, J. M. J. and J. P. HUCKABAY
1966 The Origin of Sorghum bicolor. II. Distribution and Domestication. *Evolution* 21: 787-802.
- 福井勝義
1988 「家畜における毛色多様化選択の文化的装置——エチオピア西南部牧畜民ポディの民俗遺伝観から——」『在来家畜研究会報告』12: 1-46。
- FUKUI, Katsuyoshi
1987 Rationality or Irrationality in Folk Knowledge Systems: Characteristics and Possibilities of Development in Traditional Subsistence Activities in Semi-Arid Africa. In P. Smith (ed.), *Project Identification in Developing Countries: Identifying Better Development Initiatives in the Agricultural and Rural Sectors*, IDPM. University of Manchester.
- HARLAN J. R.
1975 Our Vanishing Genetic Resources. *Science* 18: 618-621.
- HARLAN, J. R. and J. M. J. de WET
1972 A simplified Classification of Cultivated Sorghum. *Crop Science* 12: 172-176.
- HARLAN, J. R. and Ann STEMLER
1976 The Races of Sorghum in Africa. In Harlan, De Wet and Stemler (eds.), *Origins of African Plant Domestication*, Mouton Publishers, pp. 465-478.
- HAYWARD, D.
1984 *The Arboreal Language: a First Investigation*. Hamburg, Buske.
- JACKSON, M. T., J. G. HAWKES and P. R. ROWE
1979 An Ethnobotanical Field Study of Primitive Potato Varieties in Peru. *Euphytica* 29: 107-113.
- JOHNS, T. and S. L. KEEN
1986 Ongoing Evolution of the Potato on the Altiplano of Western Bolivia. *Economic Botany* 40(4): 409-424.
- LÉVI-STRAUSS, C.
1962 *La Pensée Sauvage*. Plon, Paris.
(『野生の思考』大橋保夫訳 みすず書房 1976)
- 松井 健
1991 「バルーチ族のヤシ文化」田中二郎・掛谷誠編『ヒトの自然誌』平凡社, pp. 193-212。
- PLUCKNETT, P. L., N. J. H. SMITH, J. T. WILLIAMS and N. M. ANISHETTY
1983 Crop Germplasm Conservation and Developing Countries. *Science* 220: 163-169.
- RICHARDS, P.
1986 *Coping with Hunger: Hazard and Experiment in an African Rice-farming System*.

Allen & Unwin.

重田眞義

- 1988 「ヒト——植物関係の実相——エチオピア西南部オモ系農耕民アリのエンセーテ栽培と利用」『季刊人類学』19(1): 191-281。
1990 「「品種」はどのようにして創出されるのか？ エチオピア西南部アリ地域におけるモロコン地方品種を例に」『日本アフリカ学会講演要旨集』。
1991 「エチオピア西南部におけるエンセーテの品種保存」田中二郎・掛谷誠編『ヒトの自然誌』平凡社, pp. 213-232。
印刷中 「品種の創出と多様性の維持をめぐるヒト——植物関係」『地球に生きる』第四巻 第二部『多様性を創造する文化』福武書店。

STEMLER, A. B. L., J. R. HARLAN and J. M. J. DE WET

- 1975 Caudatum Sorghums and Speakers of Chari-Nile Languages in Africa. *Journal of African History* XVI (2): 161-183.
1977 The Sorghum of Ethiopia. *Economic Botany* 31: 446-460.

TAKEI, Emiko

- 1984 Variation and Geographical Distribution of Cultivated Plants in the Southern Sudan. In K. Sakamoto (ed.), *Agriculture and Land Utilization in the Eastern Zaire and the Southern Sudan*, Kyoto University.